

# 風土



# 哲学堂にて

# 神蔵器

武相荘  
三句

万緑や庭の真中に椅子一つ

あたたかや郵便受けに石の白

笹子鳴く正子の書齋北向きに

コーヒーはキリマンジャロや燕の子

哲学堂にて  
二句

くわうくわうと孔子と釈迦と葱坊主

亀鳴くや千史万卷文字秘めて  
竹の子掘る桂郎のゐて銀次ゐて  
時の日や東慶寺より建長寺  
墨すつて一字を贈る涼しかり  
珍客に這つて四・五尺茗荷の子  
激痛の胸初蝶の飛びたてり  
虹立つや試歩のはじめの第一歩



# 竹間集

同人作品



残花

小林輝子

杉の秀の陣取り遊び春の禽  
春禽の動きに眼追ひつけず  
命より大切なもの亀鳴けり  
靴先の向きたる方へ鸞のこゑ  
何の芽となく噴き出づる空家かな  
かたくりの花にかがめば雪匂ふ  
西行の詠ひし山の残花かな

春未だ

田村すゝむ

揺れてゐてまだ一片も梅散らぬ  
浮き上る水占ひの文字おぼる  
春未だ深夜ラジオに訃報聞く  
左利きの文具コーナー入学期  
啄木新居花の明かりの帽子掛  
つばくろや三つ並びの二階蔵  
崩ると云ふ言葉あり白牡丹

新緑

塩田杉郎

花冷えや社務所に大き葉缶沸く  
担ぎ来し子をまづ下ろす花疲れ  
若芝や干し傘のすぐ裏返る  
小流れに曲がり角あり蝌蚪群る  
武蔵野の名残りの春に来てゐたり  
新緑の中 新緑の深 大寺  
道迷ひても新緑の中をり

ががんぼ

田中佐知子

夕永し墓参ふたつをふるさとに  
紀の川の耀くあした武具飾る  
木道に歩荷のひびき五月来る  
時鳥火の気無き炉のほのぬくき  
時鳥入山ノートの湿りかな  
ががんぼや上目づかひの竜燈鬼  
阿修羅像の眉間の翳り五月雨

雪の肌

工藤ミネ子

残雪を着流しのごと鳥海山は  
繭籠るやうに村あり雪解靄  
野に還りつつある捨て田梅開く  
梅の香や斎場へ径別れゆく  
疲れ切る四月も末の雪の肌  
桃咲くや空き家に午後の日の廻る  
小熊とて爪の鋭き薄暑かな

鳥帰る

柴田 久子

たましひのごとく幹よりさくら噴く  
境内にたこ焼き屋ゐて花祭  
新幹線ばかり描く子春休  
田の水の平なりけり初蛙  
カンバスに石楠花の影重ね置く  
胸像の虚子を残して鳥帰る  
春陰や付かず離れず師弟句碑

亀の鳴く

中村 洋子

国境なき医師団に寄付四月かな  
亀鳴けり敷石にある経の文字  
虚子の忌の桜の下に集まれり  
花吹雪虚子の墓前にをりにけり  
茶柱の二本の立ちて万愚節  
復活祭月より大きピザたのむ  
締め切りは明日となりぬ亀の鳴く

春時雨

根岸善行

越 後 桜 北 陸 桜 能 登 桜  
花 冷 や 押 さ ね ば 開 か ぬ 電 車 の 扉  
山 里 の 家 二 三 軒 昼 蛙  
熊 笹 に 光 生 ま る る 春 時 雨  
狼 煙 灯 台 を 落 ち る 武 者 影 蝶 の 影  
鶯 や 道 山 が ち に 原 が ち に  
義 経 に 舟 隠 し 岩 木 の 芽 張 る  
回 船 問 屋 黒 島 地 区 や 燕 来 る  
県 指 定 文 化 財 簷 乙 鳥  
桜 貝 砂 に 埋 も り を り て こ そ

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

星になるために今宵めさくら散る  
鯉のぼり峡に渡して村おこし  
夜も浮く柳絮流れてネオン街  
月蝕の始まる空へ帰る鳥  
黒々と畑おこされての鴨の列

小林 和子

茶の芽摘む自づと茶摘唄弾む  
八十八夜手揉み漏らせるたなごころ  
金蘭の我が人生に教へかな  
竹の子の伸ぶる早さに十歳児

安永 圭子

ひらがなのははのてがみや花はこべ

野口英世

下萌や言葉を探す一万歩  
春浅し軸透明のボールペン

間島あきら

胞子吐く土筆憂鬱始まれり  
はなびらの内は真つ白紫木蓮  
盧芽や風にいろある遠江

杉本薬王子

木蓮の蕾はみんな北を向く  
陽が射せばたんぼの花話し出す  
藪椿落ちて地上の火となりぬ  
風向きに小鴨泳げり高瀬川  
太宰府の鳥居はいくつ燕くる

雲所 誠子

陽炎の中へ鎗矢的を射る  
一線のやがて一点鳥帰る  
招かれて桜吹雪の躍口  
天平の蕈に並ぶ初つばめ  
ポケットにヘルマンヘッセ草萌ゆる

◇特別作品◇(抄)

## 九月のドイツ

遠藤迫遙子

いくたびも衣類詰め替ふ秋の旅  
栗飯のもてなしありしスイス航<sup>エ</sup>空<sup>ア</sup>  
雲間よりシベリアの秋覗きけり  
柘榴熟れ日躍弥撒の始まりぬ  
五ヶ国語飛び交ふ秋のカフェテラス  
ニールンベルク<sup>ニ</sup>句  
今日子規忌ひねもす雨の止むことなし  
ドイツ旅一挙に秋となりにけり  
ベルリン<sup>三</sup>句  
秋高し「前畑」しのぶスタジアム  
町中になほ壁残し秋の風  
長き夜や旅締めくくる焼うどん

# 風土集



## 神蔵器選

みづうみの時をり冥む桜東風 津山 生田 作

日おもての桜吹雪に歩み入る  
水底のゆらり傾く大桜

花明り人の話を聞き流す  
遅き日や寺門修理の長梯子

大鴉吹き流さるる花の上 律山 生田恵美子

湖の見えて若葉路つづら折り  
風光るぬた場に鹿の蹄あと

たんぽぽや復元住居口開けて  
呼び鈴に声あり畳む春日傘 春満 月十四 行の半生記 藤枝 間島あきら

霾るや千体仏に尺の厨子  
うぐひすや開く酒造の大鉄扉

辻ごとに上ル下ルよ京の春  
花菜風ラジオ真中に木椅二脚

宇治橋を渡りてよりの臍かな 川崎 鈴木庸子

亀鳴くや永久に清しき五十鈴川  
夫婦岩つなげて春の潮かな

花どきや染井門より六義園  
飛鳥山落花を浴びて都電ゆく 蛸蚪に会ふ野外学習二時間目 東京 中嶋陽子

池の面に天窓のあり蛸蚪の国  
霞立つ山懐に栗鼠の村

ふらここを漕ぎて大地を揺さぶりぬ  
花冷えや椅子を回せば腰高く

山門も鐘も国宝白牡丹 大和 落合絹代

子ら去りてより鞆鞭をそつと漕ぐ  
大根島の牡丹その名も島娘

囀りのこぼるるところ悟堂像  
ひと振りに濡れ身の蚯蚓踊り出

づ武蔵野の相聞歌より薔薇開く 横浜 安永 圭子

湧水におたまじやくしの影泳ぐ

一斉に大山蓮華の芽吹きかな

城跡の三葉柏に春惜しむ

土二つ並ぶ我が名や春耕す

三椏に花の遅速のありにけり

春宵や金平糖を振り出だす

一花だに見えぬ枝より落花かな

浜風を陸へ引き込み凧揚がる

夏近し吹かるるさまの乙女像

啄木忌鉄棒あればぶら下がる

利休忌や本坊閉ざす大徳寺

鎌倉に大粒の雹虚子忌なり

ミモザ買ふ青空市場ミモザの日

見送りの旗出迎への花吹雪

駅に祀る厄除け地藏花ふぶく

抱きしめてばつとはなすや春の月

小田原の桜漬とよ白湯ゆるぶ

逝きし人残されし者藤の花

陸橋の下メーデーの旗通る

川崎

遠藤逍遙子

中根 美保

豎山 道助

平田紀美子

米寿祝ぎ同時に咲きぬ紅白梅

異国語の電話が歩く臍かな

屋上に蜜蜂を飼ふ銀座ビル

白椿落ちて発止と音を断つ

水明かり若葉明かりに深大寺

葉桜や偈頌を称へて鐘を撞く

紅椿石田波郷の墓所なれば

水の斑の向かう釈迦堂蝶の昼

神代小橋渡れば浄土梅ひらく

芝青く踵返しぬクロツカス

満開の桜の中に伎芸天

薔薇咲いて石の天使に石の羽根

門前に蕎麦打つ音や竹の秋

花に雨幹の芯まで濡れてをり

振り向くと猫も振り向く花木

芝桜誰かをいつも励まして

雲雀鳴くと青空さらに広がりぬ

寺町の献灯に灯が入り夏来る

開帳や押せや押せやの南無大師

観音のうしろに雨の桜かな

福生

雨宮 桂子

川崎

内藤 静

川崎

水井千鶴子

京都

杉本葉王子